

2021年7月11日 礼拝説教要旨

詩編講解説教68「死から解き放つ神」

詩編68：20～21、エフェソ2：1～6

第68編は全体として出エジプトの出来事が反映されております。「神よ、あなたが民を導き出し、荒れ果てた地を行進されたとき、地は震え、天は雨を滴らせた。シナイにいます神の御前に。神、イスラエルの神の御前に。神よ、あなたは豊かに雨を賜り、あなたの衰えていた嗣業を固く立てて、あなたの民の群れをその地に住ませてくださった。恵み深い神よ、あなたは貧しい人にその地を備えられた」（68：8～11）「その地」というのは、イスラエルの人々にとっては約束の地カナンを指します。イスラエルの人々は神さまに導かれてエジプトを脱出し約束の地カナンを目指して40年間荒野を旅しました。今日わたしたちにとっての約束の地は、神の国、天を指していると理解してよいでしょう。わたしたちはこの地上を旅して、やがて約束の地である天にたどり着くのであります。第68編でも「天」が出て来ます。「主よ、神よ、あなたは高い天に上り、人々をとりこし、人々を貢ぎ物として取り、背く者も取られる。彼らはそこに住み着かせられる」（19節）このような天を目指して地上を旅するイメージを念頭におきながら、この詩編68編を読むとこの詩の全体の流れが見えてまいります。

例えば、新約聖書に「天の故郷」（ヘブライ11：16）あるいは「わたしたちの本国は天にある」（フィリピ3：20）という御言葉がありますように、わたしたちの向かう最終目的地は天です。わたしたちの人生は死で終わりではありません。『ハイデルベルク信仰問答』では「死はむしろ罪との死別であり、永遠の命への入口なのです」（問42）と告白します。そこから先の命、永遠の命を見据えています。わたしたちは死の先の命まで含めて人生を考えなければなりません。そうすると死はいわば通過点に過ぎないのです。わたしたちは死に対してあまりに過剰になり過ぎてはいないでしょうか。ことさらに死を恐れ、忌み嫌い、これを避ける傾向があります。これには宗教も関係していると思いますが、特に日本人はそういう傾向があります。

牧師としてこれまでにすでに多くの方々を天にお送りしてきました。以前、宮崎県の教会に仕えておりましたとき、教会員が亡くなって教会で葬儀をしたところ、出棺の時になっていきなり葬儀社の方が棺桶の蓋を釘で打ちつけたということがありました。あとで聞きましたらこの地方ではそういう風習があるということ。現在はほとんどなされていないようですが、どうして釘で棺桶の蓋を打ち付けるのか。それは死を封印するということだと思います。仏教では葬式があると「忌中」と書きますが、やはり死は忌むべきもの、避けるべきものという考えがあるのでしょうか。塩で清めたり、友引には火葬しないという風習もそういうところから来ています。ことさらに死を恐れ、これを避けている。それは死そのものに囚われているということではないでしょうか。死に支配されているのです。

では人間はこの死から自由になることができるのでしょうか。結論から言うと、人間単独であればそれは無理と言わなければなりません。御前に罪を犯したアダムとエバに神さまは言われました。「塵にすぎないお前は塵に返る」（創世記3：19）つまり罪ゆえに死が定められてしまった。パウロも言います。「死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか」（ローマ7：24）けれども今日の詩編の御言葉に「主をたたえよ。日々、わたしたちを担い、救われる神を。この神はわたしたちの神、救いの御業の神、主、死から解き放つ神」（20～21節）とありました。「死から解き放つ神」神さまがわたしたちをこの死の支配から逃れさ

せてくださる。そのために神さまはわたしたちを担われるのです。イスラエルの人々にとって、それは出エジプトの出来事でした。死の世界であったエジプトから神さまは逃れさせてくださいました。また7節に「焼けつく地」とあります。荒野もまた死の世界です。荒野に放り出されたら死を待つしかない。けれども神さまはマナを与え、水を与えて養ってくださった。そのようにイスラエルは神さまに背負われて、約束の地カナンへと導かれたのであります。親が子を背負うようにしてイスラエルは約束の地に逃れることができました。

それは何よりイエス・キリストの救いを指し示しています。キリストはこの世に来られ、わたしたちと同じ人間とされました。そこでわたしたちの存在をすべて担われました。まるで子を背負うように、わたしたちの全存在を背負ってくださった。それは徹底されました。半分神さまで半分人のように中途半端に担われたのではない。100パーセントまことの人とされました。その証拠に最後は十字架におかかりになられ死なれました。わたしたちと同じように死なれたのです。その死の支配までも全部担い尽すためです。そして死から解放放つために三日目によみがえられ、天に昇られて、神の国、天へわたしたちを結びつけてくださいました。「主よ、神よ、あなたは高い天に上り・・・」(19節)ですからこの詩編にはキリストの受肉から十字架、よみがえり、昇天までのことが示されていると読むことができます。そのようにして神さまはわたしたちを死から逃れさせてくださいました。

わたしたちは死を恐れ、これにがんじがらめに囚われています。いつも死が頭をよぎり、死がつきまといます。けれども神さまはこの死をも支配されるお方、まことの主です。死を打ち破り、勝利され、その先の永遠の命へと、わたしたちの人生をつないでくださいます。人生の目的地である神さまの御国へとつなげてくださるのです。それゆえ教会は「身体によみがえりを信ず」とはっきりと告白します。死からの救いを信じることがわたしたちの幸いです。